

音楽的基礎力向上手法の実践と考察

井本英子

IMOTO Hideko

本稿は、本学児童教育学科の専門教育科目「音楽Ⅰ」における教育実践に関する研究である。保育士・教員養成課程科目としての音楽の分野で、学生に必要な技能を効果的に身に付けさせるための学習方法を考察するためのものである。音楽力を伸ばすということは、音楽を楽しみ、共感する音楽的な感性を磨く上で、歌唱や楽器演奏を通して音楽表現力を向上させていくことである。学生に求められる音楽力は多々あるが、鍵盤楽器学習初心者及び初級者には、正しい音楽的基礎力を確実に身に付けることが必要不可欠である。

音楽的基礎力の中でも「読譜力」の項目の授業実践を紹介し、その効果と今後の課題を考察する。

キーワード：音楽力、音楽的基礎力、読譜力、音名読み取り課題

1. はじめに

本学児童教育学科では、音楽関連の科目として、「音楽Ⅰ」（1回生前期）、「音楽Ⅱ」（1回生後期）、「保育内容・音楽表現Ⅰ」（2回生前期）が必須科目として設定されている。「音楽Ⅰ」の授業目標は『ピアノ実技のレッスンを通して、ピアノの基礎技術と読譜力の習得から幼児・児童の教育現場に対応できる技能を養う。さらに、音楽に対する感性を高め、幼児・児童の感性をも豊かに育てるための音楽教育のあり方を学ぶ。』である。授業形態は実習で、担当者別のピアノ実技の個人レッスンを行う。また必要に応じてグループ授業も行う。

本学は、入試科目に音楽の項目が含まれていないため、鍵盤楽器演奏経験の全く無い初心者から、幼少期よりピアノレッスンを受け、ピアノ講師の道を希望する学生まで、その音楽経験歴は幅広く、技術能力の差は大きい。

演奏技術が練習量と比例するのは周知のことであるが、自主的に練習に取り組むことを学生任せにはしておけないのが現状である。

1回生前期の授業期間一実質4ヶ月15回—の中で、音楽的基礎力定着及び向上のための効率的な授業カリ

キュラムを考案して、学習効果を上げることが教員にとって最大の課題となっている。

音楽的基礎力の中でも、保育士・教員養成校の学生に特に必要な項目としては、音楽の諸要素（メロディー、リズム、ハーモニー）を把握すること、楽譜を読み取ること、そして、ピアノ及び教育現場で使われるいろいろな楽器の演奏技術を習得することである。

授業は上記項目を総合的に取り入れた内容であるが、ここでは、音楽的基礎力の中でも必須要素となる楽譜を読み取ること、すなわち「読譜力」の部分を紹介する。

ピアノ演奏の譜面を読譜するためには、まず、譜表（音部記号—高音部記号・低音部記号—の記された五線譜）に記された幹音（変化記号によって変化されていない音）を読めることが第一歩である。その上で、派生音（変化記号—＃、♭等—を付けて幹音より派生させた音）を理解する。そして、音符、休符といった音価を把握し、リズムや拍子、調性、楽語等読み取ることができていく。今回は幹音の読み取りのみを実施。

本研究では、学生の音名読み取りの取り組みと成果、そして学生の意識変化を詳述する。

2. 方法

調査期間：平成24年4月～9月

調査対象：児童教育学科2回生

「音楽I」受講生4名

[設備上の問題で人数を限定しなくてはならなかったため、今回は4名のこのクラスの学生を対象とした。]

幹音読み取りの方法としては、幼児の場合、五線に記された音符を、絵・図柄として直感的に捕らえ、ゲーム感覚で覚える方法が有効であるが、成人の場合は、幼児にくらべ、知能が発達しているため、図的処理よりも数理的処理をしたほうが理解しやすい。そこで、単音を個別に反射的に速読するばかりではなく、音高の位置関係を数えて、単音ではあるが、前音とのつながりも手がかりにできるようにした。

3. 授業の展開と内容

毎回授業の最初の項目として「音名読み課題」を実施。音高の区別はつけず、「ドレミファソラシ」で記す。まず、課題[A]の制限時間内の正解数から、学生の現在の理解度を知る。その結果から各学生の理解度に応じた課題を実施。

<第1回授業>

課題[A] 全30問

課題[A]



課題の音域 は～3点ハ (C～c3)

(※譜例1参照)

(用語説明は3章末※音名譜例参照)

高音部譜表課題15問、低音部譜表課題15問。いずれの課題も最初に例題として、1点ハ(c1)を記し「ド」と答えを書いてある。また、いずれの課題も例題～第2問目は順次進行。各課題制限時間は2分間。

課題[A] 高音部譜表課題について

音域 イ～3点ハ (a～c3)

第8・9・13・14問目は加線

最大跳躍2オクターブと2度

問	例	1	2	3	4	5	6	7	8
音程	ド	2	2	4	3	5	7	4	7
※①		↑	↑	↑	↑	↓	↑	↓	↑

9	10	11	12	13	14	15
3	4	4	5	7	2oct + 2	4
↑	↓	↓	↓	↓	↑	↓

※①音程は度数のみ記す。完全系、長短系の区別はしない。「↑3」は前問の音より3度上がる、「↓3」は前問の音より3度下がる、を表す。

課題[A] 低音部譜表課題について

音域 は～1点ニ (C～d2)

第9・11・12・14問目は加線

最大跳躍1オクターブと3度

問	例	1	2	3	4	5	6	7	8
音程	ド	2	2	6	3	6	5	4	9
		↑	↑	↑	↑	↓	↑	↓	↑

9	10	11	12	13	14	15
3	5	6	3	9	6	10
↓	↑	↓	↑	↑	↑	↓

課題[A] 実施結果

学生	高音部譜表課題正解数	低音部譜表課題正解数
a	7	0
b	14	14 ※②
c	15	15
d	15	15

※② bの学生は第1回目の授業が欠席であったので、次週同条件にて実施。

学生 a の答案より

高音部譜表 1 点ハ (最初にドと記している) から五線内を数えながら読むことはできる。加線の読み方はわからない。ドレミファソラシドと音階の上行形は思い浮かぶが、ドシラソファミレドと音階の下行形には馴染みがなく認識しがたい。そのため低音部譜表の課題は最初のドが記してあっても、その後が下行形のため解答できない。

学生 a のみならず、低音部譜表については、一般的に馴染みがない。本学 1 回生鍵盤楽器経験者であるが、課題 [A] に関して、高音部譜表課題正解率は96.0%、低音部譜表課題正解率は79.9%。低音部譜表課全問正解者の高音部譜表課題正解率は100%、高音部譜表課題全問正解者の低音部譜表課題正解率は90.3%である。

<第2回授業>

学生 a は、第4回授業まで欠席。

学生 b は、前述※①のとおり前回課題を一週間おくれで今回実施。

学生 c, d は課題 [C] に進む。

課題 [C] 全40問

課題 [C]

課題の音域 は～3点ハ (C～c 3)

(※譜例2 参照)

高音部譜表課題20問、低音部譜表課題20問
両課題とも例題は無い。上下に幅の広い跳躍は避けて3, 4度の跳躍が中心。全体の音域は広いが、慣れれば速く読めるようになりやすい課題。

各課題ごとに解答にかかったタイムを計る。同じ課題をしている学生どうして答え合わせをする。タイムと正解数を別表に記す。

課題 [C] 高音部譜表課題について

音域イ～3点ハ (a～c 3)

第10・12・13・15・18・19問目は加線

最大跳躍1オクターブ

問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
音程	ミ	3	2	3	5	3	2	3	4	2
		↑	↓	↓	↑	↑	↓	↑	↑	↑

11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
3	4	2	6	4	5	8	3	2	6
↓	↑	↑	↓	↑	↓	↓	↓	↓	↑

課題 [C] 低音部譜表課題について

音域 は～1点ホ (C～e 2)

第8・9・15・16・18問目は加線

最大跳躍6度

問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
音程	ド	4	3	5	2	5	3	6	2	6
		↓	↑	↓	↓	↑	↓	↑	↑	↓

11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
5	4	3	4	4	3	4	5	4	4
↓	↓	↑	↓	↓	↑	↑	↓	↑	↑

<第3回授業以降>

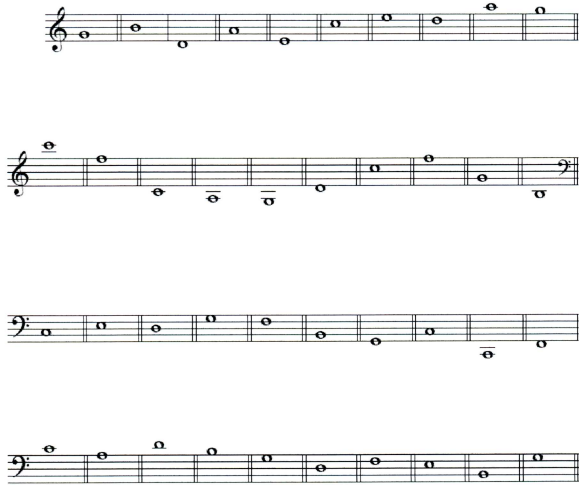
毎週一回ずつ計4回同じ課題に取り組む。5回目には課題を鍵盤奏で解答する。このときは音名だけではなく、譜面の音高と鍵盤の音高を一致させて解答とする。

課題 [C] を終了した学生は課題 [D] に進む。

学生 a は、同様の方法で課題 [B] に取り組む。

課題 [D] 全40問

課題 [D]



課題の音域 は～3点ハ (C～c3)
 (※譜例3 参照)
 高音部譜表課題20問、低音部譜表課題20問

課題 [D] 高音部譜表課題について
 音域 ト～3点ハ (g～c3)
 第9・11・12・13・14・15・20問目は加線
 最大跳躍1オクターブと5度
 前半は1～5番、6～10番のブロックで6度以内の音域内で動いているので速く読める。後半は上下の幅、跳躍ともに課題 [C] より難しい。

問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
音程	ソ	3	6	5	4	6	3	2	5	2
		↑	↓	↑	↓	↑	↑	↓	↑	↓

11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
4	5	12	3	2	5	7	4	7	6
↑	↓	↓	↓	↓	↑	↑	↑	↓	↓

課題 [D] 低音部譜表課題について
 音域 は～1点ニ (C～d2)
 第9・11・13問目は加線
 最大跳躍1オクターブと5度
 課題 [C] と同レベル。低音部譜表のさらなる定着をねらう。

問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
音程	ド	3	2	4	2	5	3	4	8	4
		↑	↓	↑	↓	↓	↓	↑	↓	↑

11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
12	3	4	3	3	4	3	2	4	6
↑	↓	↑	↓	↓	↓	↑	↓	↓	↑

課題 [B] 全40問

課題 [B]



課題の音域 ろ～2点ニ (H～d2)
 (※譜例4 参照)
 高音部譜表課題20問、低音部譜表課題20問

課題 [B] 高音部譜表課題について
 音域 1点ハ～2点ニ (c1～d2)

1点ハ(ド)のみ加線
 最大跳躍6度
 順次進行を基本に1点ハ～2点ハマまで数えずに読めるようになることをねらった課題。

問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
音程	ド	2	2	3	2	2	2	2	3	3
		↑	↑	↓	↑	↑	↑	↑	↓	↓

11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
2	2	2	2	2	3	3	2	2	6
↓	↑	↑	↑	↑	↓	↑	↑	↓	↓

課題 [B] 低音部譜表課題について

音域 ろ～1点ハ (H～c 1)

1点ハ (ド) のみ加線

最大跳躍4度

音階の下行形に馴染み、下行して数えることに慣れることをねらった課題。

間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
音程	ド	2	2	2	4	3	2	3	2	2
		↓	↓	↓	↑	↓	↑	↓	↓	↓

11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
4	4	2	2	2	2	3	3	2	3
↑	↓	↓	↓	↓	↑	↑	↓	↑	↓

※音名譜例、音域譜例1～4

音名

はにほへといろハニホヘトイロハニホヘトイロハニホヘトイロハ
C D E F G A H c d e f g a h c1 d1 e1 f1 g1 a1 h1 c2 d2 e2 f2 g2 a2 h2 c3

(※譜例1) 課題[A]音域

イ (a) 3点ハ (c3) は (C) 1点ホ (d1)

(※譜例2) 課題[C]音域

イ (a) 3点ハ (c3) は (C) 1点ホ (e1)

(※譜例3) 課題[D]音域

ト (g) 3点ハ (c3) は (C) 1点ホ (d1)

(※譜例4) 課題[B]音域

1点ハ (c1) 2点ニ (d2) ろ (H) 1点ハ (c1)

4. 結果と考察

学生の取り組みの表を以下にまとめて示す。

学生 a

課題 [B]		5/24	6/28	7/5
ト音	タイム (秒)	63	40	41
記号	正解数	20	20	19
へ音	タイム (秒)	101	104	53
記号	正解数	19	11	20

課題 [C]		7/19
ト音	タイム (秒)	70
記号	正解数	18
へ音	タイム (秒)	18番 ※③
記号	正解数	6

※③ 120秒以内で解答できた問題数

7/19が「音名読み取り課題」最終日なので、課題 [C] に取り組む。

学生 b

課題 [C]		4/26	5/10	6/7	7/5
ト音	タイム (秒)	34	35	40	46
記号	正解数	20	20	20	20
へ音	タイム (秒)	61	65	53	46
記号	正解数	17	10	20	17

課題 [D]		7/19
ト音	タイム (秒)	34
記号	正解数	20
へ音	タイム (秒)	45
記号	正解数	19

学生 c

課題 [C]		4/19	4/26	5/10	5/17
ト音	タイム (秒)	78	54	57	50
記号	正解数	19	20	20	19
へ音	タイム (秒)	128	80	83	77
記号	正解数	20	20	20	20

課題 [C] 弾く		6/7
ト音記号	タイム(秒)	125
ヘ音記号	タイム(秒)	93

課題 [D]		6/7	6/28	7/5
ト音記号	タイム(秒)	55	57	67
	正解数	20	20	20
ヘ音記号	タイム(秒)	70	88	73
	正解数	20	20	20

学生 d

課題 [C]		4/19	4/26	5/17	5/24
ト音記号	タイム(秒)	55	54	51	39
	正解数	20	20	20	20
ヘ音記号	タイム(秒)	101	58	78	57
	正解数	20	20	19	20

課題 [C] 弾く		6/7
ト音記号	タイム(秒)	90
ヘ音記号	タイム(秒)	113

課題 [D]		6/7	7/5	7/19
ト音記号	タイム(秒)	46	48	44
	正解数	20	20	20
ヘ音記号	タイム(秒)	47	44	45
	正解数	20	19	20

「音名読み取り課題」は12回の実施となった。後半3回の授業は、実技試験準備で時間がとれなかった。第1回目は理解度確認の課題であったので、実質11回。欠席や6月第2週からの幼稚園実習のため授業の中断で、毎週の積み重ねになりにくい。学生aの場合、前半の積み重ねの時期に欠席が多く、他学生との理解の差も開いてしまった。それでも、課題[B]の3回目実施のあと、「やっとわかってきた。早くからしておけばよかった。」と前半の欠席を悔いていた。

前半に休まず積み重ね学習ができた学生は、各々が自分なりの達成感を感じて取り組んでいた。もともと再履修のため、第1回目の授業時は「音楽」の授業自体に非常に抵抗があるようであった。課題[A]が100点だったことで気持ちが上向き、第2回授業では、抵抗無く取り組み、その後は、読譜できてきたことを実感でき前向きに取り組んでいた。学生cは祝日のために2週間ぶりとなったときの実施でタイムが伸びなかったことをくやしがり、また学生dも、3週間ぶりのときの結果をみて継続の大切さを口にしていった。

母集団が少ないこと、読譜以外の様々な音楽基礎項目課題も継続して行ったので、「音名読み取り課題」で培った基礎力とピアノ演奏力向上とが直結したか明言できないが、学生b, c, dは前期末にはピアノ演奏力も向上した。

この結果より、「音名読み取り課題」の継続した取り組みは、第一に、学生の意欲喚起に有効であるといえる。音楽実技は、苦手と思っている学生にとっては、積み重ねに時間がかかり、すぐに結果がでにくくますます敬遠されてしまうのだが、達成感の感じられる課題を継続的に取り入れることで、学生の授業に対する取り組み方により影響を与えることを確信した。

第二に「音名読み取り課題」は、初心者でも確実に上達の手応えを受け取れる項目であることがわかった。五線上の音名の読み取りは、図柄(記号)を音名に変換する一つの取り決め作業なので、音楽的素養の有無にかかわらず、繰り返し音符を読む経験を積み重ねることで、速く読めるようになる。速く読めればそれだけ早く歌ったり、弾いたりすることができることを実感でき、演奏力向上につながることを期待できる。

5. 今後の課題

今後は、15回の半期の授業内で最も効率よくレベルアップするための「音名読み取り課題」の1回毎の課題量を検討していきたい。また、上・中級者が初心者と同時間内に更なるスキルアップができる有効な課題を研究して、音楽力に差がある大人数のクラスでもそれぞれがレベルアップしたことを実感できるような課題を作成して実践していきたい。

ピアスーパバイザーからのコメント

学生が与えられた課題によって達成感を感じることは、学生の学習意欲の向上に有効であることが伺えた。また、学生は達成感を感じることで音楽への学習意欲が高まり、同時に他の科目への学習意欲の向上につながることを期待された。本研究で成果を上げた学生が他の科目への学習意欲向上につながることを立証されれば、音楽的基礎力向上手法が他の科目に貢献することになる。「〇〇できない学生（例：達成できない学生、理解できない学生、自立できない学生）」を「〇〇できる学生（例：達成できる学生、理解できる学生、自立できる学生）」に導くことが我々教員の使命であると再確認した論文であった。

(担当：児童教育学科 藤島 みち)